

絵本とともに

— 幼いきょうだいと暮らす —

藤津 麻里

皆さんは、自分の子どもに絵本を買い与えて読む方ですか？ それとも、図書館などで借りてきて読んでやることが多いですか？ うちでは買うのが九割、借りるのが一割といったところででしょうか。私の職業は大学図書館の司書なのですが、図書館の利用者としては、あまり熱心なほうではありません。地元の公共図書館が遠くて利用しに

くいからです。最近、次男を連れて、近くの保育園の子育て支援センターに遊びに行くようになり、そこから少しずつ絵本を借りてきては、子どもたちに読み聞かせるようになりました。でも、そこにはない絵本で「これは読んでやりたい」と思うものは、やはり買って手に入れたい。絵本のガイドブックを参考に、面白そうな絵本や、自分が

幼い頃読んだ絵本をビックアップして、書店に注文したり、次はどれを買おうかとリストを作って楽しんでいきます。

ところで、絵本は普通の家庭ではいったい何冊くらい買っているのが適当なのでしょう？——変なことでも悩んでいるな、とお思いでしょうね。もちろん、自分の好きなようにすれば良いのですけれど……。私の実家は小さな幼稚園をやっているため、絵本は何百冊もありました。子育てをしていると、折にふれて、実家にあつたいろいろな絵本のことか思い出され、あれも読んでやりたいな、私ももう一度読みたいな、と思うことがあるのです。でも、狭い我が家で際限なく絵本を買い込むことはできないし、あまり数が多すぎるのも、子どもにとつて良いことなのかどうか疑問です。それでも、ある程度、家に絵本が置いてあつて、いつでも読めることは大切だと思うし……。

家のスペースや予算、そして、子どもたちの様子を見ながら、少しずつ買ったたり、借りたりしている今の状態が、ちょうどいいのかもしれない。

三歳六か月の長男は、車の絵本が大好き。『とらつくとらつと』『のろまなローラー』『しょうぼうじどうしゃじぶた』（いずれも福音館書店）と、車の絵本を一冊ずつ借りてきてやるととても喜び、毎日寝る前に「読んで」と持つてきます。小さな頃から車や電車が好きで、ミニカーの絵本や、『働くじどうしゃ』（小学館）の図鑑を熱心に見ていました。息の長いセットになっているのが『ブルドーザとなかまたち』（福音館書店）。昨年、親戚の子からおさがりで貰った絵本です。『ブルドーザは、つちを けずりと、たくさん のつちを おして あつめます。シヨベルローダは、ブルドーザの あつめたつちを すくいと、ダンプトラックまで はこびます。』……と

いうように、工事現場でいろいろな車が働く様子が、簡潔な文章と精緻な絵で描かれています。地味な絵本ですが、長男はこれが大好き。一歳七か月の次男も、何度も見ているうちに好きになったようで、この本を見ながら「ちゅち、ちゅち（土）」というようになり、外でパワートショベルなどを見かけても「ちゅち！」と言っています。ページの中に小さく描きこまれた小犬を探すのも、二人の楽しみの一つです。長男は、場面ごとの小犬の台詞を考えて、「うわ！、レーキドーザだ、逃げようつと」なんて、小犬を演じて楽しんでいます。

次男の方は、少し前までは、『おつきさまこんばんは』（福音館書店）や『いないいないばあそび』（偕成社）などの赤ちゃん向けの絵本が好きでしたが、兄の影響もあって、少し長い物語性のあるものも楽しんでいます。『わたしのワン

ピース』（福音館書店）では、「わたしに あうかしら」という言葉が出てくるたびに、「アッ！」「ンッ！」などと、相の手のように可愛い声をはさみます。これは長男が始めたもので（「にあうかしら」なんていうおすまじした言葉がおかしいのでしょうか）、次男も真似しているのです。絵本を読んでもらいながら声を出したり、言葉を覚えて一緒に台詞を言うのも楽しいですね。『おつきさまこんばんは』では、「ごめん ごめん」 「だめ だめ」などと、絵本の中の言葉を言うようになりました。

長男の方は、絵本によってはお話を丸ごと暗記してしまうほどで、子どもの記憶力には本当に驚



かされます。『ゆかいなかえる』（福音館書店）や『三だいの機関車』（ポプラ社）のページをめくりながら、字が読めるかのようにすらすと暗誦するのです。この子はまだ文字はほとんど読めませんが、読めるようになったらどう変化するのでしょうか。文字を覚えてたの子どもによくみられる、一文字ずつ拾って読むぎこちない読み方で、同じ本を読むようになるでしょうか。今の読み方とそれとは、どうつながっていくのか、あるいは一種の断絶が起きるのか……今から楽しみです。

『ゆきのひ』（偕成社）も、子どもたちが好きな絵本です。黒人の男の子のピーターが、雪の中で遊ぶ一日を描いたものです。雪の上のいろいろな足跡をつけてみたり、雪だるまを作ったり、木の枝に積もった雪を棒でつついて落としてみたり、雪の山を登ったりすべったり……。この絵本を読んでいると、作者のキーツが、子どもの一人遊び

の楽しさを本当によく知っているのがわかります。一見、とりとめなくも見える小さな遊びの連続。雪が降ったことへの喜びと驚き。幼い子どもの世界がとてよく描けているように思えます。（余談になりますが、最近のテレビの子ども番組は、大人が小手先でチョイチョイと考えただけのひねくれたものが時々見受けられるのが残念です。子どものためのクリエイターになるのは、決して簡単なことではないのだと思わずにはいられません）

次男は、ピーターの頭の上に雪のかたまりが落ちるところが好きで、「どしん！」と言ってニコしています。雪が降った日には、「きゅっ、きゅっ、きゅっ」と、絵本に出てくる言葉を口に出しながら、雪を踏んで楽しんでいました。長男は、ピーターのように「ゆきだんご」を作って、服のポケットに入れて家に入るんだと言い出して

(絵本の中では、ポケットの中に雪玉が溶けてなくなってしまう、ピーターはがっかりするので) 困りました。

この絵本は、私にとっては母との思い出の本でもあります。暖かい静岡で育った私には、雪は憧れでした。四歳くらいの時でしたか、サンタクロースに「ゆき」のプレゼントをお願いしたので。残念ながら、クリスマスになっても雪は降りませんでした。そのかわりにこの『ゆきのひ』の絵本が届いたのです。こんな手紙を添えて。

「ゆきは もってこられなかったの、

ゆきのひの えほんにしました。

セント・ニコラスじいさんより」

私自身には、この時の記憶は残っておらず、このエピソードと、プレゼントの主が母だったこと

を後から聞かされて育ちました。雪をリクエストされて、母がどんなに頭をひねったことだろうと、親となった今は微笑ましく感じられます。母は十年以上前に亡くなったので、もう話を聞くことはできないのですが……。

『ゆきのひ』の絵のシックな印象が、大人になった私の心にも残っていたように、子どもたちの中にも、今楽しんでいる絵本の記憶が何かの形で残ってゆくことでしょう。親子で絵本を読む時間が、子どもたちにとって幸せなものであるように、そして、素敵な絵本との出会いがたくさんあるようにと願いつつ、これからも自然体で絵本を楽しんでいけたらと思っています。

(会津若松市在住)